Hokuriku University

北陸大学　紀要
第17号　(1993)
pp. 1～12

大麻文化科学考[1-3)]
(その4)

山　本　郁　男*

A Study on the Culture and Sciences of the Cannabis and Marihuana. IV[1-3)]

Ikuo Yamamoto*

Received October 25, 1993

第4章　漢方薬としての大麻

第1節　はじめに

「大和」,「近江」そして「越中」は，我が国における三大薬業地として有名であり，現在でも大中小の製薬所がひしめいている。その大和にはシルクロードの東の端の博物館と位置づけられる奈良，正倉院があり，その御物の中に麻の織物があることは良く知られている。しかし，この時代に「麻」が「薬」として用いられていたかどうかということについての確かな証拠はない。

次章に述べるように，明治に入って「印度大麻」は日本薬局方の第一局から第五局まで「鎮静，催眠薬」として収載されていた。このことは輸入大麻製品であるが，64年の永きにわたって重用されていたことは確かである。だが，前報までに述べてきたように大麻を繊維作物として古来，日本人は用いたが，薬物としては余り関心がなかったようにみえる。

わずかに奈良県薬業史（資料編）のp308に明治22年竹原麻雄が「満妙薬いろは歌」として金刀比羅大神の奉納絵馬に麻の葉，茎が「打身」に効用あることを記している。[4)]

即ち，ウの項に「打身の薬を尋ねれば麻壹(あさ)の葉を茎(くき)共に能(よ)く干(ほ)し黒焼きにして酒にて呑ますべし…」とある。また現在でも便秘薬に「麻子仁丸(ましにんがん)」や「潤腸湯(じゅんちょうとう)」が使用されている。この中には「大麻の種子」が主薬としての役割をはたしている。さらに，心悸亢進症に用いる「復脈湯(ふくみゃくとう)」（炙甘草湯(しゃかんぞうとう)）には麻子仁が処方されている。[5)] このように例は少ないが，我が国においても大麻は種子，葉，茎が薬用としての実績をもっていることが示されている。ではお隣の中国ではどうなのか，ということを漢方薬としてここにとりあげてみることにする。幻覚作用としての大麻が「悪の顔」であるならば，漢方薬としての大麻は「善の顔」であろう。

漢方薬としての大麻をみると，種子は「麻子仁（火麻仁）」，根は「麻根(まこん)」。茎皮部の繊維は

＊薬学部
Faculty of Pharmaceutical Sciences

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

「麻皮(まひ)」。葉は「麻葉(まよう)」。雄株の花枝は「麻花(まか)」，雌花の若い果穂は「麻蕡(まふん)」と各々の呼名があり，いずれも薬用に供されている。従って，大麻は捨てるところがない。全草が薬なのである。

以下，詳細に解説を試みることにする。

第2節　薬用大麻[5-25]

第1項　薬材概説

中薬（中国古典医学）における「大麻」の原植物はあくまでもアサ（*Cannabis sativa L*）であり【神農本草経集注】には単に大麻(たいま)と記載，【事物起源】では漢麻(かんま)，【日用本草】には火麻(かま)とある。【救荒本草】には山糸苗(さんしびょう)。【本草綱目】には黄麻(おうま)との呼名がある。

一年生の草本。雌雄異株，高さ1～3メートル（6メートルに及ぶものもある），茎は直立，分枝，表面はざらつき縦溝あり，短い柔毛が密生。葉は掌状複葉で互生，しかし茎下部の葉は

Fig. 1　大麻の雄株および雌株（著者画く）

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

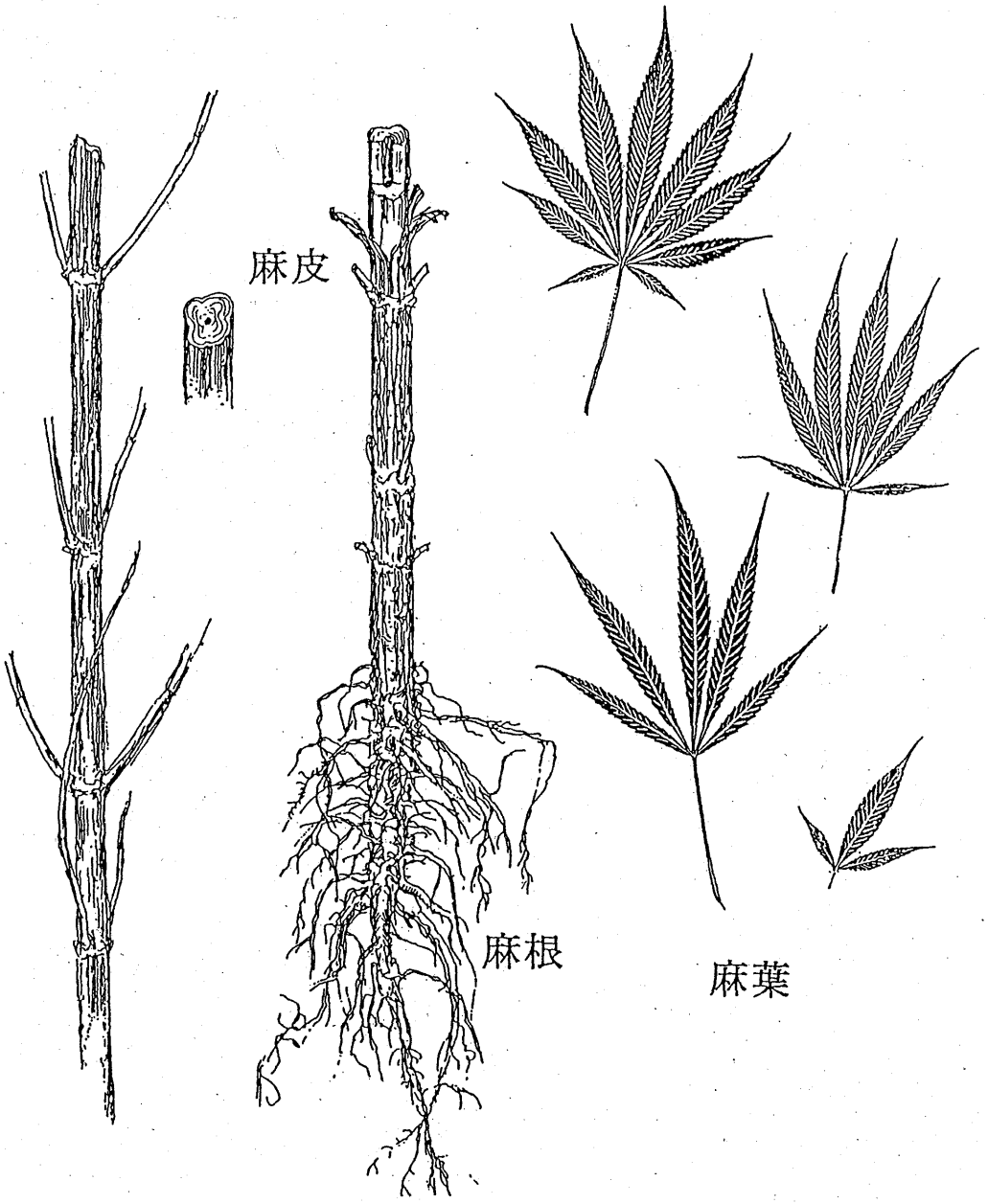

Fig. 2　大麻の茎，根および葉（著者画く）

対生をなしている。(Fig. 1 および Fig. 2)。小葉は３～11枚（Fig. 2），必ず奇数。披針形ないし線状披針形，先端は長く尖る。基部は楔形，縁には荒い鋸歯がある。表面は深緑色，ザラザラ，裏面は灰白色の絨毛が密生する。柄の長さは４～14cm，短い綿毛が存在する。このようにアサの葉は特異的であるので麻の葉模様として古く平安時代から仏像の衣に切金で表された。江戸時代には女性の半えり，下着，すそまわりなどに流行した幾何学模様でもある。

花は単性。雄花（麻花）はやや黄味を帯びた白色の円錐花序をまばらにつけ（Fig. 1），花被５枚，長卵形で瓦状に配列。５本の雄しべをもち，花糸は細長い（Fig. 3）。

雌花は葉腋に叢生し，緑色，花ごとに卵形の苞片で外がおおわれ，花被１枚，膜質，雌しべ１本。子房は円球状，花は２分枝する（Fig. 3）。秋になると扁平な卵形の瘦果を結ぶ。この種子は詳細に後述するが全長４～５mm，表面は細かい網紋があり外側はさらに黄褐色の苞葉

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

(苞片) で包まれている (Fig. 4)。開花期，結実期は産地によって大きく異なる。中国の華東は5～7月，華北は6～9月，日本では9～11月である。

採集は秋～冬に種子が成熟した後，全株を引き抜き，日干して種子及び根を得る。種子は打ち落とし，丁寧に夾雑物を取り除く，根はよく洗って乾燥。これらの前に花，茎，葉は随時収穫する。

Fig. 3　大麻の雄花および雌花（著者画く）

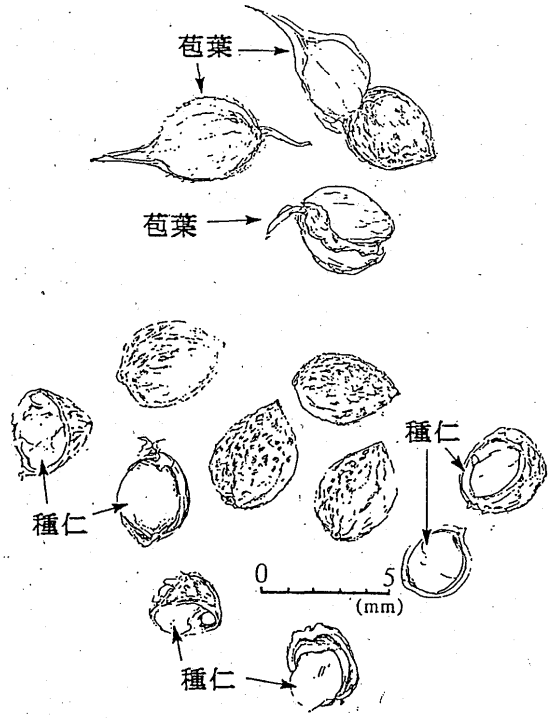

Fig. 4　大麻の種子（著者画く）

第2項　麻子仁（火麻仁）

漢方薬として最も多用される部分は大麻の種子である。すなわち，「麻子」は最初【神農本草経】で用いられた語句であるが，何故か，中国では広く正式名として火麻仁 (huǒ má rèn)【日用本草】が多用されていた。我が国では【傷寒論】が広く浸透しており傷寒論に麻子仁の記載があるため「火麻仁」とは云わず「麻子仁」が通称名となった。これが混乱する原因である。しかし，これに止まらず多くの異名があって一筋縄ではいかない。それらを列挙すると大麻子【神農本草経集注】，大麻仁【薬性論】，白麻子【千金・食活】，冬麻子【食医心鑑】，火麻子【本草新論】などがある。我が国の【大同類聚方】[9]，【本草綱目】[10]や【大和本草】[11]には阿差介美（麻子仁）があてられている。従って，本著では麻子仁を多用することにする。

麻子仁の起源は，「アサ科の植物，大麻（和名のアサ）の種仁」である。「種仁」とは，一般に種子から種皮のみを取り除いた中味をさし，胚，胚乳，胚軸，幼根および子葉を含む部分，全てをいう。

薬材として用いる乾燥種子は扁平な卵円形をなし長さ4～5mm，直径3～4mmである。表面は光沢があり，滑らかで灰緑色ないし灰黄色を呈している。さらに，よく観察すると微細な白色，褐色ないし黒色の花紋があり，両側に各々1条の浅色の稜線をもつ。丁度，鶉の卵を小さくした様な色調，形状をしている。一端は純く尖り，もう一端は柄が脱落した凹状の跡を

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

残す。外果皮は薄く，内果皮は堅いが脆くはずれやすい。緑色の種皮は通常内皮上についており離れ難い。胚乳は灰白色をなし薄い。子葉は２枚，肥厚していて，油性に富む。匂いはわずか，性味は淡泊。種子（薬材）は黄色で皮殻が無く豊満なものが良い（Fig. 4）。

炮製（ほうせい）（修治）は種子の外殻を除去，仁だけを取り出し，ゆるく乾燥する。

麻子仁（火麻仁）の薬効と主治は様々であり，我が国では【傷寒論】に基づく用法のみが流布されているが中薬（中国古典医学）では多くの疾病に使用されている。それらの全てを記述すると共にTable 1にまとめた。

Table 1　大麻薬材の諸性質

【　】は出典[5-19]を表す。

薬材名	性　味	帰　経	用法・用量	薬効・主治・配合・その他
麻子 （麻子仁，火麻仁）	甘，平 （緩和に働く） 【神農本草経】 辛，無毒 【呉普本草】 寒（熱をとる） 【唐本草】 微寒 【食療本草】	脾，胃，大腸の経 足の太陰，手の陽明の経 【湯液本草】 肺，太陽の経 【薬品化義】 脾，胃，大腸の経 【本草求真】	［内服］ 3-5銭 （銭は約3.7g） 丸剤 散剤 ［外用］ 油を絞って塗布 ついで汁を塗布	・虚労，下焦の虚熱，関節痛，筋肉痙攣，小便不利，便秘，語気の衰弱，口渇→麻子仁５合を研り砕き，水２升を加え，半分になるまで煮詰め服用【外台秘要方】 ・産後鬱冒（血暈）で多汗，便秘【本事方】 ・口渇，血尿，小便難→麻子１升と水３升を加熱沸騰，汁を取り出し服用【肘後方】 ・五淋（石淋，気淋，膏淋，労淋，血淋）による血尿，貧尿排尿病→麻子１升を杵で砕き，ろ過して汁を取り、米３合と煮て粥とする。葱，椒を加えて煮る。空腹時に服用【食医心鏡】 ・脚気浮腫，口渇【外台秘要方】 ・風水（表証のある浮腫），腹部膨満【食医心鏡】 ・骨髄風毒呵疼痛（身体腹部痛），運動不能【箧中方】麻子仁，酒 ・白痢→麻子汁を緑豆と煮，空腹の際飽食【必効方】 ・小児の赤白痢，虚弱体質→麻子１合を香りが出るまで炙炒り，粉末を蜜シロップと共に服用【子母秘録】 ・月経不順，無月経【肘後備求方】 ・産後の瘀血【千金方】麻子酒 ・妊婦の腹痛【食医心鏡】 ・嘔吐【近効方】

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

薬材名	性味	帰経	用法・用量	薬効・主治・配合・その他
				・小児の頭面瘡疥→麻子5升を粉末とし、水を加えて汁を絞り取り、蜜を加えて塗布【千金方】【子母秘録】 ・切傷【千金方】 ・手足の瘰疬【千金方】 ・赤流腫丹毒→麻子に水を加えてつき、これを患部に塗布【千金方】 ・火傷→麻子，黄柏，黄梔子と共に研り粉末とし、猪脂でほどよく調えて塗布【四川中薬志】 ・聤耳（膿耳），膿汁の止まらぬ耳疾→麻子を1合，花臙脂1分を研り粉末とし，耳一杯に薬でふさぎ，綿で軽くおさえる【太平聖恵方】 ・麻仁は要薬である【本草思弁録】
麻花 （鳥麻花）	苦辛，温，有毒 辛，無毒【呉普本草】 味は苦く，微熱，無毒【薬性論】	脾，胃，大腸の3経	［内服］ 粉末 ［外用］ 灸	・風を去る。血を活かすの効能。 ・リウマチによる肢体麻痺→麻花4，草鳥1を薬性を残す程度に炒り，紛末とし，蜜で練ってから調えて膏とし1回3分を湯で服用する。【本草綱目】 ・遍身痒，諸風悪血【薬性論】 ・婦女の月経閉止，不通 ・健忘症 ・金瘡内漏（刀槍の傷口から汁が出る様）の治療 ・瘰癧→麻花と艾を同量とり，あわせてついて灸をつくり癧子（悪性のオデキ）に一百壮の灸をする【千金方】
麻蕡	辛，平，有毒 味は辛，平【神農本草経】	脾，胃，大腸の経	［内服］ 1～2分を煎じて服用 ［外用］ つきつぶして患部に塗布	・風を去る，止痛する，痙を鎮めるなどの効を一般に有す。 ・痛風（リウマチ），痺証（関節痛，筋肉痛のこと），癲狂，不眠，咳喘の時もまた効く。 ・五労七傷を主る。五臓を利す。血寒気を下す。【神農本草経】 ・積を破り、痺を止める。膿を散らす。【名医別録】

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

薬材名	性　味	帰　経	用法・用量	薬効・主治・配合・その他
麻葉 （火麻頭）	辛，有毒 【本草綱目】	手，足の経 胃，大腸の経	［内服］ つき汁を服用 丸剤 散剤 ［外用］ ついて塗布	・マラリア，喘息，回虫症に効く。 ・鎮痛，麻酔，利尿作用【東北薬植志】 ・喘息→タバコの葉に混ぜて吸うと喘息を治す。【中国薬植図鑑】 ・回虫駆除→葉をついて汁を絞り取り５合を服用する【唐本草】 ・サソリ毒に塗布 ・マラリアの治療→麻葉を鍋に入れ、香りがするまでゆっくり炒る。粉末とし発作がおこる４時間前に茶または温酒で濃いめに調えて飲用。丸剤，蜜丸としても可【普済方】 ・鳥金散は疔腫，時毒，悪瘡を治すがこれに麻葉を麻黄と共に処方すると発汗がおこる。これはマラリアの発作防止にも利用される。【本草維目】【普済方】
麻皮	甘，平	手の陽明，足の太陰経【本草彙言】	［内服］ ３－５錢を煎じて服用 研って粉末にして服用	・瘀をさる，水を利すの一般効能を有す。打撲傷，熱淋脹痛（熱による排尿困難による脹痛）を治す。 ・漚麻汁（麻の皮を繊維が離れやすいように水に浸しておいた汁）は消渇を止め鬱血に効【唐本草】 ・血を破る，小便を通す。 ・打撲傷，骨折による疼痛→黄麻の皮の焼灰と頭髪の灰各１，乳香５錢を粉末にし、３錢ずつ温酒で服用する【王仲勉経験方】 ・発熱による排尿困難→麻皮１両，炙った甘草３分，水で煎じかすを除き食前に服用【太平聖恵方】 ・破傷風→麻皮４両を焼き、研って細かい粉末にする。適量の白酒を加え，1/4ずつ１日２～３回湯で服用。布団をかぶって汗を出す。治療10例のうち９例が治癒した。服用後１～２日以内に効果。
麻根 （麻青根）	甘，平	手の陽明，足の太陰の	［内服］ 煎じるか，	・瘀を去る，止血の効能がある。淋病，血崩，帯下，打撲傷を治す。

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

薬材名	性味	帰経	用法・用量	薬効・主治・配合・その他
		2経【湯液本草】	あるいはつき汁を服用	・瘀血，石淋（膀胱結石）→麻根の煮汁を飲む【陶弘景】 ・難産，帯下→水で煮て服用 ・淋下血→麻根10本と水5升を煮【肘後備急方】 ・安産→麻根3茎を水1升で煎じ，半升をとり頓服する。 ・腕折骨痛（足首，手首の骨折痛） ・崩中不止（激しい子宮出血）【本経逢原】

麻子仁は帰経（作用部位）として肺臓，脾臓，胃および大腸に作用する。【湯液本草】には足，手に。【薬品化義】は肺臓，大腸に。【本草求眞】には脾臓，胃，大腸にとしていることから内臓等および末梢に作用すると考えられる。

また他書には，麻子仁は「主ニ肺臓イチ潤玉臓イチ利ニ大小便イチ」とあり，燥を潤し，腸を緩め，淋を通し，血を活かす効能がある。その結果，腸燥便秘，消渇，熱淋，風痺，痢疾，月経不順，疥瘡，癬癩を治すという。「麻子レ益脾潤ニ通便秘イチ」【古方薬品考】，「麻子味甘，性手微寒主ニ補レ中益レ気イチ」【神農本草経】とある。すなわち【神農本草経】によれば「中を補い気を益す」とあり，【名医別録】には中風に効き，水を逐いやり，小便を利す。また産後の余病を治すという。【薬性論】では大腸の風熱が結滞した場合を治し，熱淋にも効く。【唐本草】には一般的に，五臓の疲労によく，【食療本草】には血流をうながし，関節機能の不全，また抜け髪防止には麻子仁を水で浸漬それで粥を煮たものを食せよとある。【本草拾遺】には気を下し，下便を利，広く慢性の皮膚病に効く。面白いことに婦人の逆子の出産時に27個の麻子仁を服用するとある。【分類草薬性】に打撲傷に効果ありとす，この理由は，血を去り，新血を生じる結果であろう。これは冒頭の「いろは歌」の「打身の薬－」と符合している。以上の諸効を総合的に記したものに【日華子諸家本草】があり，それには虚労を補い，筋肉を緩め，乳の分泌を促進，消喝を止め，生気を催す。逆子を治す。【本草綱目】では婦人経脈を利し，大腸下痢を調整，各種の瘡や癩に塗布，殺虫効果もある。汁を取り出し粥を煮て食すと嘔吐を止めることができるという。大麻主成分，Δ^9－テトラヒドロカンナビノールには鎮吐作用が報告[21,22]されていることから，以上の薬効は科学的裏付けが無いので興味がもたれる。今後，これら薬効，主治の科学的解明が期待される。

以上の麻子仁の用法と用量は大略，＜内服＞には11.1～18.5gを煎じて服用。または粉末とした後，丸剤あるいはそのまま散剤とする。＜外用＞には麻子仁を乳棒で潰し患部につけるか，油を絞って塗布する。薬用とするには殻を除去して実だけを用いる。煎薬に使用する際には，麻子を乳鉢に入れ軽く擂りつぶして「種仁」を得る。しかし，乳鉢での種子の破砕は困難であるので，ミンチで荒割りしている。古書によれば「麻子を絹の袋に入れ，一時沸騰中に浸し，冷後，井戸の中に吊り下げて水に浸さないで一夜放置。これを取り出し乾燥，板の上でこすると実と殻とが分別できる。殻は吹いて除く。」という方法もある。

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

配合禁忌は漢方処方でも重要である。牡蠣，白薇，茯苓との同時服用は禁忌である。また，多食すると血流が悪くなり，精気を消失する。また，婦人は多量服用しないこととある。このことは麻子仁の不明の激しい作用がうかがい知れる。腸の緩んだ人には特に避けるべしと【本草縦新】に記述されている。

配合処方例として【傷寒輪】では「趺陽の脈が浮で渋なるものの治療」，「浮ならば胃気強となる，渋ならば小便は頻繁となる」「浮と渋とが相対すると大便は秘便となる。それは脾臓の働きが制約されたからである。」とある。

冒頭に記した「潤腸湯」の処方を記す。麻子仁は「潤燥の剤」としての役目がある。潤はうるおす，燥は乾燥を意味する。すなわち乾いているものを潤す薬である。この乾燥の原因は血液，ホルモンの不足にあり，その結果，必然的に細胞の液の欠乏をきたす。手はザラザラとして割れ，皮膚枯燥の状態となる。あるいは大便は固くなりコロコロとした大便が出てくる。従って緩和な下剤として，滋潤の効があるので，体液が欠乏して皮膚，粘膜の枯燥の傾向のある場合に用いる。老人の常習便秘症，高血圧症，動脈硬化症，慢性腎炎に合併した便秘症，他の下剤が奏効しない時に用いる。

麻子仁（２）の他，当帰，熟地黄，乾地黄各（３），桃仁，杏仁，枳実，厚朴，黄芩，大黄各（２），甘草（1.5)。因みにツムラの51番潤腸湯の組成には麻子仁（２）当帰（３），地黄（６），黄芩（２），杏仁（２），厚朴（２），大黄（２），桃仁（２），甘草（1.5）である。勿論，前述のごとく単味でも麻子仁は便秘に緩下剤として有効である。

その他に張仲景によりなる麻子仁丸がある。これは麻子仁の他に芍薬，枳実，厚朴，大黄，杏仁等を組合わせたもので「潤腸湯」との主な違いは芍薬を用いている点である。現在，麻子仁丸という処方名で売り出しているメーカーにはウチダ和漢薬，石切漢方製薬，阪本漢方製薬，荷居屋杉原達二商店，東洋漢方製薬，松浦薬業，三和生薬，ジェーピーエス製薬，高砂薬業，小太郎漢方製薬（マシニーン）等がある。虚証体質向き，この処方も老人や病後の人の便秘に有効。麻子仁や杏仁が乾いている腸を滑らかにし通便する。

また，炙甘草湯がある。別名，復脈湯。麻子仁（３）の他，炙甘草，生姜，桂枝，大棗，人参各（３），地黄，麦門冬各（６），阿膠（ニカワ質）（２）の割合で混ぜ，心悸亢進と脈の結滞時に用いる。対象者は栄養状態悪く，皮膚が枯燥し，疲労しやすく，手足の煩熱，口乾がある。麻子仁は滋潤，鎮静，強壮の効や緩下の作用が期待されている。バセドウ氏病，心臓病，産褥熱，肺結核等にも用いる機会があるという。[6,12]

麻子仁丸は前述の湯と違って麻子仁を主薬とする。麻子仁（５）の他，芍薬，枳実，厚朴各（２），大黄（４），杏仁（２)の割合で煉蜜で丸剤とし，１回量２個を頓服する。これは勿論，既述のように緩和な下剤であり，特に老人，病後の人等で，体液が枯渇して皮膚や粘膜に滋潤が不足しがちで、便秘している者に著効す。尿量が多い割りに大便が硬いという者にも良い。麻子仁は粘滑性の下剤で大黄の瀉下作用に協力する。麻の実を研り砕いて，米または雑穀で粥をつくり，これを食べる【肘後備急方】。

その他の用法，薬効，配合については麻花，麻皮，麻葉，麻蕡と共にTable 1 にまとめた。

麻子仁の成分は脂肪油を約30％を含有する。この内訳は飽和脂肪酸4.5～9.5％，不飽和脂肪酸90～95％（オレイン酸12％，リノール酸53％，リノレン酸25％)。この油中に若干のカンナビノイドが含まれている。絞りたての新油は黄緑を呈しているが，漸次，黄褐色に変わる。ヨ

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

ウ素価140～170。乾性油に属する。またフィチンを含有するが，この率は，麻葉，麻皮，芽部より多い。種仁中の含有率は1％程度。トリゴネリン，L(d)－イソロイシン－ベタインなどを含むがこれら成分については，別章として述べる。

第3項　麻花

麻花（má huā）は【名医別録】に用いられた語である。アサ科の植物，大麻（和名アサ）の雄株の花枝をいう。別名，異名として鳥麻花【千金方】がある。

第1項に原植物の詳細を記したので省略する。

麻花の花穂の部分には特に分泌樹脂が多く，カンナビノイド（テトラヒドロカンナビノール(THC)，カンナビジオール（CBD)，カンナビノール（CBN)）を含有する。なかでもTHCは前報[1,2]でも述べたように麻酔性が最も強い。大麻樹脂には，カンナビジオール酸を主とするカルボン酸体，THC，CBD，CBN，カンナビゲロール等のC_{21}からなるカンナビノイド約60種を含む。この他，トランス・ケイヒ酸，コリン，トリゴネリン，ムスカリン。アミノ酸としてアルギニン，ヒスチジンを含有する。

麻花を水蒸気蒸留すると精油0.5％が得られるが，この中にはオイゲノール，α-ピネン，β-ピネン，カフェイン，α-テルピネン，γ-テルピネン，β-フェランドレン，リナロール，トランス・リナロール－オキシド，サビーネン，α-セリネン，β-ファルネセン，α-ベルガモテン，クルクメン，カリオフィレン－オキシド等を含有する。また，少量のピペリジンを含有するが，これは野生大麻の悪臭の原因となっている。麻花は抗菌成分カンナビジオールを含む。

麻花の性味，薬効，配合等についてはTable 1にまとめて示した。

第4項　麻蕡

麻蕡（má fén）は【神農本草経】に基づくもので，異名として蘩，枲実【爾雅】，麻勃【神農本草経】，麻藍，青羊，青葛【呉普本草】など多くの名がある。大麻の若い果穂，雌花との説が有力。【金匱要略】，【傷寒論】にはこの麻蕡の名称はないことから，花か実か混乱したのかも知れない。麻蕡は麻花（雄花）と明らかに異なるものであろう。また麻子とも違う。麻子は無毒，麻蕡は有毒と【名医別録】にあることをつけ加えておく。

いずれにせよ麻蕡は最も強い成分（THC）を高い含量有していることから鎮痛，鎮痙，鎮静作用を主治としたと考えられる。

性味，薬効，主治，配合などについてはTable 1にまとめて示した。

第5項　麻葉

麻葉（má yè）は【薬性論】記載の用語。別名，火麻頭と呼び【療科必要】，火麻仁に対応する。いわゆる大麻の葉である。

葉の主要成分はΔ^9－テトラヒドロカンナビノール酸，カンナビジオール酸，カンナビクロメン酸等の酸性成分。葉の酸性成分の3.8～41.7％はカンナビジオール酸が占めている。大麻が成熟するとこのカンナビジオール酸の含有率は最低となる。これは生合成の過程を示すものであろう。アルギニン，リジン，アラニン等のアミノ酸，フィチン等も検出されている。性味，薬効，配合等についてはTable 1にまとめて示した。

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

第６項　麻皮（まひ）

麻皮（má　pí）は【本草綱目】にあり大麻の茎皮部の繊維をさす。【本草彙言】の帰経の項には「手の陽明，足の太陰経に入る」とある（これは漢方医学独自の体系をもつ気血運行の通路で経絡（けいらく）という）。手には太陰肺経，少陰心経，厥陰心包経，少陽三焦経があり，足には陽明胃経，太陰脾経，太陽膀胱経，少陰腎経，少陰胆経，厥陰肝経等がある[10,11]。打撲傷，破傷風の治療に用いる。

第７項　麻根（まこん）

麻根（má　gén）は【神農本草経集注】にある語句で大麻の根茎をいう。【薬性論】には麻青根（せいこん）という異名がある。この名は麻の根を見れば納得できる。

瘀血を去り，止血の効能が知られ，淋病，血崩，帯下，難産，打撲傷（打身）を治す。

根を細切，煎じるか，あるいはつき汁を内服する。性味，薬効，配合などについてはTable 1にまとめて示した。

第８項　漢方薬としての大麻の薬効の裏付け

前項に述べたように大麻は現在，「大麻取締法」並びに「麻薬および向精神薬取締法」の対象となっている。しかし，特にΔ^9－テトラヒドロカンナビノールを含有する葉および樹脂を含む花穂の他，種子（麻子仁），麻根，麻皮，麻花および麻蕡として中国では漢方薬として用いられている。我が国の現状をみるとき，驚嘆を禁じ得ない。勿論，「毒は薬であり，薬は毒なり」の大前提に立てば当然かも知れないが…。以下，若干の薬効の裏付けと考察をしてみたい。Table 1に示すように，麻皮に破傷風治療とある。破傷風は周知のように土壌中の*Clostridum tetani*によるもので，激しい痙攣をおこす。大麻成分にはカンナビジオールという抗痙攣作用を有する成分があり，テトラヒドロカンナビノールには鎮痛，鎮静作用があることから、破傷風の治療に有効かも知れない。既述のようにテトラヒドロカンナビノールには鎮吐作用がある。近時，米国では抗癌剤投与時の嘔吐に大麻成分を使用するという報告さえある。麻子の下剤効果は麻子中に含まれる飽和脂肪酸と不飽和脂肪酸の高い含有量によるものであろう。切傷，打撲傷などはカンナビジオールの抗菌作用が利用されているかも知れない。

いずれにせよ、多彩な薬効を有する大麻は著者が前報でも強調したように丁度モルヒネと同じように成分の抽出分離あるいは誘導体の合成によって必ずや人類にとって有効な医薬品の開発の材料とヒントを提供するかも知れない。

第３節　おわりに

以上，「漢方薬としての大麻」について，種子，茎皮，葉，花および根と全てを詳述したが，その薬としての応用には巾広く奥深いものがある。しかし，それらの有効成分の化学構造と薬理作用については，科学的に不明なものも多い。これらは後述する予定である。結論として，漢方薬として大麻が今後さらに見直されるべき内容を有していることが本章によって再確認されたであろう。

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

謝 辞

本研究は渡辺和人助教授，松永民秀，木村敏行，宇佐見則行助手並びに恩師，吉村英敏教授（九州大学名誉教授，中村学園大学教授）ほか，多くの協力者によって遂行され，また，現在もなお続行中のものである。ここに深謝する。

参考文献

1）山本郁男，「大麻文化科学考（その1）」北陸大学紀要 14, 1－15（1990）.
2）山本郁男，「大麻文化科学考（その2）」北陸大学紀要 15, 1－20（1991）.
3）山本郁男，「大麻文化科学考（その3）」北陸大学紀要 16, 1－20（1992）.
4）奈良県薬業史編さん審議会編集，奈良県薬業史（資料編）P308 奈良県薬業連合会発行 昭和63年（1988）.
5）大塚敬節，矢数道明，清水藤太郎，漢方診療医典 南山堂（東京）（1982）.
6）江茨新医学院編，中葯大辞典，上海新ゆ印刷丁（1986）. 同訳,小学館第一巻（1985）.
7）東丈夫，村上光太郎，漢方薬の実際知識 P263 東洋経済新報社（東京） 昭和55年（1980）.
8）陳存仁，漢方医学大辞典（Ⅱ巻），中国薬学大辞典 講談社（1982）.
9）槇佐和子，大同類聚方（上，下）全訳精解，新泉社（1992）
10）白井光太郎，鈴木眞海，本草綱目，春陽堂（東京）（1929）.
11）白井光太郎，河本孝之，大和本草，有明書房（東京）（1978）.
12）千金要方刊行会，備急千金要方（上，下），毎日新聞開発㈱ 昭和51年（1976）.
13）東亜医学協会，漢方の医学，雄渾社（東京） 昭和55年（1980）.
14）龍野一雄，漢方医学大系，雄渾社（東京） 昭和53年（1978）.
15）H.Sakaguchi et al., Proc. of the 4th Int. Cong. of Oriental Medicine, GENDAI SHUPPAN PLANNING（1985）.
16）湯本求真，皇漢医学（上，下），燎原書店（東京）（1983）
17）金陵胡承竜，本草綱目，春陽堂（東京）（1979）.
18）藤田路一，生薬学，南山堂（1970）.
19）高木敬次郎，木村正康，原田正敏，大塚恭男編，和漢薬物学 P245 南山堂（1986）.
20）牧野富太郎，原色牧野和漢薬草大図鑑 北隆館（東京） 昭和63年（1988）.
21）赤松金芳，新訂和漢薬，医歯薬出版㈱ P507（1980）
22）伊沢凡人，原色版日本薬用植物辞典，誠文堂新光社（東京） 昭和55年（1980）.
23）大麻（CANNABIS），依存性薬物情報研究班（厚生省） 昭和62年（1987）.
24）M.C.Braude and S.Szara, Pharmacology of Marihuana（Volume 1, 2）A Monograph of the National Institute on Drug Abuse, Raven Press, New York（1975）.
25）G.G.Nahas, Marihuana in Science and Medicine, Raven Press, New York（1984）
26）M.S.Gold, Marijuana, Plenum Medical Book Co., New York and London（1989）.

NII-Electronic Library Service